

外国人受け入れを支える社会的インフラの具体像： 地方公共団体による地域日本語教育体制の整備に着 目したアクション・リサーチ

深江，新太郎

<https://hdl.handle.net/2324/7443571>

出版情報：Kyushu University, 2025, 博士（学術），課程博士
バージョン：
権利関係：



氏 名 : 深江新太郎

論文名 : 外国人受け入れを支える社会的インフラの具体像
—地方公共団体による地域日本語教育体制の整備に着目した
アクション・リサーチ—

区 分 : 甲

論文内容の要旨

本論文は、外国人住民に対する地域日本語教育の体制整備を地方公共団体による外国人受け入れの「社会的インフラ」の形成過程と捉え、地方公共団体による地域日本語教室の運営指針を提示した研究である。本論文は、本編4部10章と序言、結語で構成されている。第1部は、本論文の問いを実践面、学術面から論じ計2章から成る。第1章では、地方公共団体による地域日本語教育の体制整備の重要度が高まっている一方で地方公共団体の動機が低いことを論じた上で、本論文の実践面での問いについて、地方公共団体による地域日本語教室運営のための指針とは何か、と示した。第2章では地域日本語教育の体制整備について考察する理論的フレームを整理する中で、地域日本語教室は「社会的インフラ」として捉えられ、「社会的インフラ」を具体的に考察していくための概念として「コミュニティハブ」と「連帯ハブ」が有効であることを論じた。その上で、学術面での問いとして、これまで地域日本語教室の理論的基礎と考えられた「サードプレイス」概念の限界と「ハブ」概念の可能性とは何か、と立てた。第2部は、「コミュニティハブ」概念を軸に、地域日本語教室の理論的基礎を論じた上で、「生活者としての外国人」を対象にした地域日本語教育の目標と具体的な活動について論じ計4章から成る。第3章では、地域日本語教室を場所論の観点から理論的に捉える視座として「サードプレイス」概念の有効性について論じた。第4章では、実践を基に理論的な考察を行い「サードプレイス」概念の限界と「ハブ」概念の可能性について論じた。第5章では、「コミュニティハブ」概念における「アセスメント」を行うためにコーディネーター、ボランティアに必要な聞く技能について論じた。第6章では、「アセスメント」を基礎にした「生活者としての外国人」に対する地域日本語教育の目標を再定義し、「日常生活における自己実現」という観点を提示した。第3部は、地域日本語教室の持続的運営を支える人的・組織的基盤の形成について論じ計2章から成る。第7章では、地域日本語教室に関わる人材発掘として効果的な手法であるトークフォークダンスについて「連帯ハブ」の観点から論じた。第8章では、企業と費用分担した地域日本語教室の運営体制について、「社会的インフラ」の維持という観点から論じた。第4部は、総合考察であり計2章から成る。第9章では、これまでの議論に基づき、第1部で立てた問いに対し実践面、学術面から考察を行った。まず実践面では地域日本語教室の運営モデルについて提案した。次に学術面では地域日本語教室の理論的基礎としての「サードプレイス」概念の限界と「ハブ」概念の有効性および可能性を論じた上で、「ハブ」概念とルフェーヴルの「社会空間」の議論の接続について言及した。第10章では、今後の課題を実践面、学術面それぞれにおいて提示した。